

茶室における空間包囲性 ：亭主と正客の視深度

キーワード：視深度、茶室、空間、包囲、亭主、正客

【研究の目的】 本研究は、三次元空間内の特定位置における視深度空間記述を利用して、茶室空間内の座位置による視覚特性の違いを明らかにすることによって、利休による茶室の小間化やその後の茶匠による茶室空間の書院化など、茶室空間の形態変遷を考察する。

【茶室における空間記述】 重要文化財に指定されている茶室をはじめ、空間包囲性を探る上で重要であり、また、茶匠の創意工夫が感じられる32の茶室について亭主位置と正客位置それぞれの視深度を測定し、円錐図法・円筒図法・正弦図法によって空間記述を行った。(表1)(図1)

表1 対象とした茶室32作品

番号	茶室名	好み	年代	番号	茶室名	好み	年代
01	利休四重半	平利休	17	松寿亭	智仁天皇		
02	待庵	平利休	18	札幌八落庵	小堀遠州	江戸(寛永)	
03	不審庵	平利休	19	森友八落庵	小堀遠州	江戸(寛永)	
04	利休二道半日	平利休	20	寺日庵	平利休	江戸(天明8)	
05	露滴庵	森内紹誓	21	松保庵	黄々齋	江戸(元文4頃)	
06	昭烈亭	少少庵	22	鏡の間	如意齋	江戸(寛安4頃)	
07	庭玉軒	曾作糸和	23	又月亭	千利旦	江戸(天明8)	
08	如庵	織田有美	24	高林庵	片桐石林	江戸(寛安4頃)	
09	元庵	織田有美	25	高香庵	藤村謙軒	江戸(寛享)	
10	芭庵館	小堀遠州	26	瀧庵	江戸(寛保2)		
11	福翁舎	森内紹誓	27	萬床庵	如意齋	江戸(中・後期)	
12	織田三景分目	吉田種起	28	夕照亭	小堀遠州	江戸(寛安)	
13	香草廬	織田有美	29	飛雲亭	光格天皇	江戸(寛政)	
14	徑心亭	不見天皇	30	碧雲亭	高井不碌	江戸(寛政)	
15	素庵	森内紹誓	31	肉月亭	松平觀瀬	江戸(寛政)	
16	同餘閣	平利休	32	清音軒	前田謙善	江戸(文久3)	

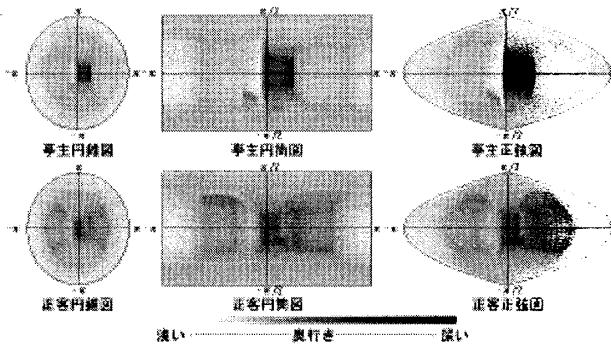


図1 視深度による空間記述の例 (09 如庵)

【32茶室における空間記述】 円錐図 視方向を中心とした空間の奥行きの変化が上下左右どう配されているかが読みとれる。亭主の空間包囲性において、視方向に局部的な奥深さをもつ茶室が多い中で、右方向と上下方向に奥深さが拡大する茶室もある。正客の空間包囲性において、亭主の空間包囲性と同様、基本的には視方向に局部的な奥深さをもつ茶室が多い中で、左右に奥深さが拡大する茶室がある。亭主と正客の空間包囲性に共通の傾

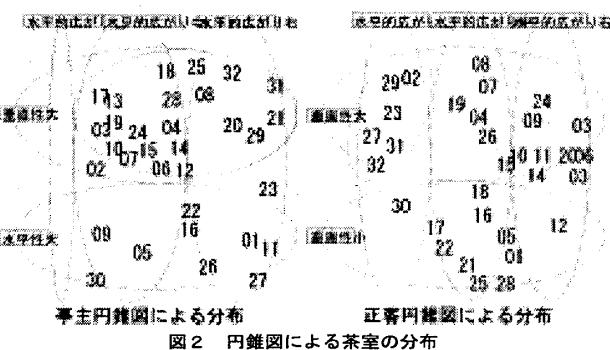
Space-Enclosure in the Tearoom

: Sight-Depth of the tea-host and principal-guest

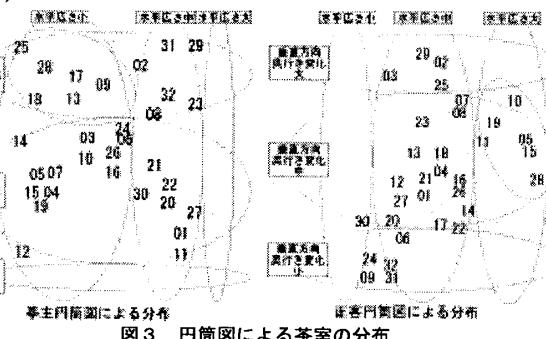
ISHIHARA yoshitaka, KITAGAWA keisuke, FUMOTO kazuyoshi, WAKAYAMA shigeru

正会員 ○石原 佳剛*
同 北川 啓介**
同 蘭 和善***
同 若山 滋 ****

向は、視方向の奥行きが深く、やや奥行きのある部分が横長に拡がり、上下方向は奥行きが浅い。前方の奥まりから水平方向に伸びるタイプである。亭主の空間包囲性では、奥深い横長な空間から交差するように上下方向の奥行きが拡大するものが顕著である。その中で上下方向にのみ奥行きが深い茶室がある。正客の空間包囲性においては、左方向に奥まる空間が左上方に大きく包み込むように拡がる顕著な特徴と、左右の奥まりが上方に拡大しており縦長に浅い上部構成がみられた。(図2)



円筒図 奥行きと、垂直方向・水平方向の構成が各空間要素における配置構成の関係として読みとれる。亭主の空間包囲性では、水平方向と垂直方向共に奥行きの変化が大きい。正客の空間包囲性では、奥行きの変化が三次元空間全体に分散している。亭主と正客の空間包囲性では、奥行きが幅広く、段階的に奥行きの浅い部分へと変化し、垂直方向には奥行きの変化は比較的緩やかに現れる。亭主の空間包囲性の特徴は、奥深い割に水平方向への広がりは小幅で、急激に奥行きが浅くなり、垂直方向の奥行きの変化も極めて大きい。極めて幅広に奥深く垂直方向の奥行きの変化が小さい上、奥深さが水平方向に大きくふたつに分断され、そこから更に奥行きが拡がる。(図3)



正弦図 空間の方向性や形態とは無関係であり、空間を構成する要素がどれだけ立体角を占有するかが読みとれる。亭主の空間包囲性では、空間の奥行きの深浅が明快に分離されているのに対して、正客の空間包囲性では、奥行きの中間的な深さが、空間の奥行きの深浅を広く連続的にしている。亭主と正客に共通の傾向は、奥深いところとやや奥深いところと奥行きの浅いところが、ほぼ同じ割合で配され、空間の奥深さが徐々に変化する。(図4)

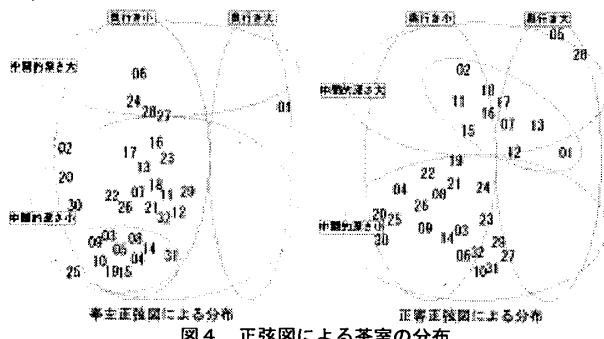


図4 正弦図による茶室の分布

【畠数における分類と傾向】 利休は二畠から四畠半に至るまで小間茶室の典型を築き上げた。三畠よりも広い小間茶室では、亭主・正客両者の空間包囲性は、水平方向のみに奥まりをみせるものと、奥深いところが上方に拡がり垂直方向の奥行き変化の大きいものが、両極端に位置付けられた。逆に、極小の小間茶室では、亭主の空間包囲性において水平方向か垂直方向の何れかに奥深いのに対し、正客の空間包囲性においては奥まりの方向に関わらず垂直方向の奥行きの変化が大きいことが特徴的である。

【茶匠による分類と傾向】 利休の茶室において、亭主・正客両位置に、垂直・水平両方向の変化の特徴が大変幅広くみられた。また、有楽の茶室において、正客の空間包囲性は垂直方向の奥行き変化が大きく顕著であるのに対し、亭主の空間包囲性は水平・垂直方向の何れに奥行きが深いかが重要である。遠州の茶室においては、亭主の空間包囲性は垂直方向のみに奥まるものに集中したが、正客の空間包囲性は水平方向のみに奥まるものと奥行きが上方に拡がり垂直方向の奥行き変化の大きいものとが、両極端に位置付けられた。

【茶室における空間包囲性の系譜】 利休による茶室の小間化における平面包囲性は、床・紗潛り・点前座といった茶室構成要素を並置する単調なものであったが、有楽・遠州・織部による茶室平面の形式化と同時に亭主と正客位置毎の平面包囲性が独自に発展し、道安以降の平面形式においては前後左右に向けて特異な平面包囲性が確認された。それに対して、空間包囲性は、利休の時代には垂直・水平方向の奥行きに僅かな広がりと変化をみせた

ものの、有楽・遠州・織部の時代には垂直・水平方向の奥行きによる特徴的な独自性はまったくみられない。しかし、その後の庸軒・石州・不昧は、基本的な内部空間の中に、床・紗潛り・たれ壁などの簡易な視線の遮蔽体を設けることで、水平方向と垂直両方向の奥行きの変化を有する茶室空間が一気に開花した。

【平面包囲性の系譜との比較】 利休に始まる初期の茶室は、ある程度の垂直・水平両方向の奥行きの変化をもっていたが、有楽・遠州・織部により茶室の平面の構えや形式が成立する過程においては、垂直・水平両方向に対する空間包囲性の変化が著しく減少した。しかし、その後、庸軒・石州・不昧は、それまでの茶室の平面の構えや形式を自在に変形させつつ、空間包囲性に対しても意図的に垂直方向と水平方向の奥行きを操り、茶匠による多様な三次元的空間操作の趣向がみられた。(図5)

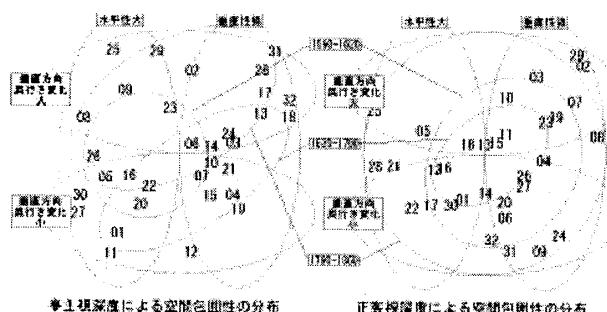


図5 茶室における空間包囲性の系譜

【結論】 茶室における亭主位置と正客位置の視深度空間記述より、亭主と正客の視覚的特徴が明確にあらわされた。亭主・正客ともに、視空間内における垂直方向と水平方向の変化を基本にして、亭主の空間包囲性に垂直性、正客の空間包囲性に水平性が伺える。これまでの茶室における平面包囲性の研究では、茶室の歴史と共に平面包囲性が多様化することが確認されている。これと比較して、利休の茶を継承した茶匠により茶室平面の構えが形式化する一時期、茶室空間は簡素化するが、その後、逆に、平面形式の多様化とともに、空間包囲の垂直性と水平性の変化が現れた。(図6)

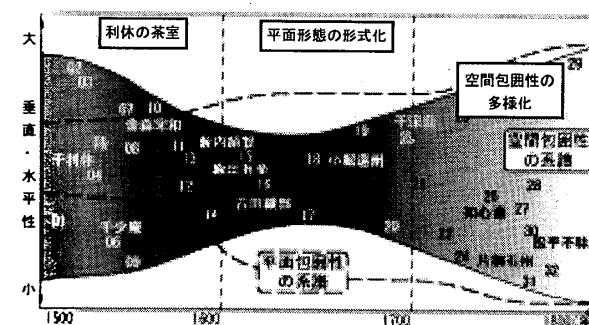


図6 平面包囲性の系譜との比較

* 名古屋工業大学社会開発工学科 博士前期課程・学生（工学） Graduate Student, Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, B. Eng
** 名古屋工業大学社会開発工学科 助手・博士（工学） Assistant Prof. Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng
*** 名古屋工業大学社会開発工学科 助教授・博士（工学） Associate Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng
**** 名古屋工業大学社会開発工学科 教授・博士（工学） Prof., Dept. of Architecture, Urban Engineering and Civil Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng